

講演要旨

一、 伝承佛画の制作

伝承佛画つまり伝統佛画（垂迹画、道釈画を含む）の概念について、実に定めにくい事なのですが、日本の佛画の流れから見ますと、飛鳥時代の588年に（崇峻天皇元年）百濟画工より大陸形式の佛画が伝来し、その後、奈良、平安、鎌倉、室町、江戸及び近世の明治時代までの変遷を経て、世界でも類のない様々な時代特色を有する佛画が存在しています。材質から見ても、土、麻布、絹、木、紙等、画法からしても密陀絵、彩色、墨画等の様々な仕様があります。ここで論ずるのは平安初期に確立した絹本彩色佛画のことです。今日は昨年暮れに、制作完成した護国寺平成両界曼陀羅図及び近作立像聖観音図の実例を通じて、伝承佛画の特有の技法（表裏彩色、表裏金箔、置き上げ金色（かねいろ）、金泥描き、截金など）を画像にて紹介したいと思います。

二、 伝承佛画の修復

当工房が手掛けた古画修復の実例を紹介して、古画修復の意義と正しい在り方について述べたいと思います。そして、今年6月に文化財保存修復学会全国大会（高知）で初めて発表した、わたくしの研究考案した「移染抜き」（※積文参照）という特許性のある独自の古画修復技術も紹介いたします。

※「移染抜き」：古画によく見られる、水漏れ、水害などの原因で表具裂地の色が溶けて本紙に移ってしまった「移染」という色移り現象です。この「移染」の染み本体と通常古画によくある染み本体との成分は発生過程においても根本的に異なっていますので、通常の水としみ抜き薬剤が効きません。そして、古軸の「移染」の場合は、多く本紙を通して、古軸の裏の総裏紙まで深く滲透し、中々除去するのに困難を極めるので、多くの作業員がそのまま放置するか、或は色塗布によって処置されます。しかし、表の色塗布は原画の画風を損なうので、お薦めできません。そして、その作業は根本的にその移染の汚れは取れていないので、年月の経過によって、その色塗布が退色し、再び現れてくるはずで

「移染抜き」は修復業界で常に未解決の難題でした。

三、 伝承佛画の復元

古画復元とは、元の古画と同じ技法、素材、寸法などで改めて模写制作し、往時の風貌を再現することです。復元作業は、古画の保存・普及に大きな役割を果たしています。当研究所では伝承技法によって、各時代の軸物・巻物・壁画・襖絵・屏風絵を復元しております。今日は威徳院室町時代の古涅槃図の復元作業の紹介を通じて、文化財伝承佛画の復元の本質の定義、過程を解説させて頂きたいと思

四、 中国本土の最新佛教美術現状の略説

- ① 今年の三月に現地視察した 2008 年発見した佛頭頂舍利を安置する南京佛頂宮と大報恩寺の莊嚴佛教美術の略述報告。
- ② 近年、注目を浴びている中国国内で唯一残存の北宋時代の山西高平開花寺の佛壁画の略述紹介。

有限会社 京都佛画研究所 代表絵師 大里宗之

平成30年9月